

学校名 東広島市立御蘭宇小学校
学校長 榎 並 愛 子

1 研究主題, 研究内容・方法等について

(1) 研究主題

一人一人が「わかった! できた!」と実感できる教育の創造
～すべての児童が考えをもち, 表現できる国語科の実践～

(2) 主題設定の理由

昨年度から実施の「小学校学習指導要領」では、「知識及び技能」「思考力, 判断力, 表現力等」「学びに向かう力, 人間力等」の3観点にまとめ, これらを偏りなく実現できるようにする事が記されている。「何を知っているか」という領域ごとに区分された知識・技能を問うものから, 知識・技能を自在に活用して「何ができるようになるか」, つまり「どのような問題解決を成し遂げるか」という資質・能力を問うものへと転換している。子どもたちは自らの力で, あるいは多様な他者と協働しながら, その都度, 状況に応じた最適解を見つけていかなければならない。めざすのは, すべての子どもを優れた問題解決者に育てることであり, そのために必要な指導内容や学習過程を構成していくことの必要性が示されている。

このような状況の中で, 本校では子どもたちに付けたい資質・能力として『自分の考えをもち, 表現する力』『基礎学力の定着』『学ぶ必要感』『仲間と共に学ぶ力』とした。

本校の児童実態として, 学習に対する意欲はあるものの, 学習に対する必然性を感じられない, 学び方がわからないなどから, 主体的に学習に臨んでいるとは言い難い。また, わからないことがわからないと言えない, 自分の考えや思いをうまく伝えられない, 話し合い方がわからないなど, 学力の定着が図られていない実態もある。さらに, 人・もの・こととの関わり方がわからないことで問題が起こることもあり, 学びの基盤に係る学習面, 生活面での支援が必要であると思われる。

さらに, 教職員の年齢層の若返りもあり, 校内研修の充実にも力を入れ, 共に学び合う教職員集団を作っていきたいと考える。

昨年度は, コロナ禍で休校中の時は, 自力学習で見つけた「わからないこと」を活かした学び方を身につけさせることを中心に「自分で学ぼう(楽習)シート」を作成した。また, 学校再開後は, その教科ならではの「見方・考え方」をつかみ取らせるために必要な学び方が身につくように, 単元のどこでどのようなシートが必要なのか, 授業でどう生かすかを考え実践を行った。その結果, 【楽習シート】を5つの型に分類することができた。①単元導入既習型(既習事項の確認)②単元導入ゴール確認型(ゴールの姿を確認)③単元全体予習型(次時の課題を発見)④単元全体蓄積型(成果物を作成)⑤個別支援型(個に応じた支援)である。このシートを作成・活用しながら, 対話を交えて教科の内容を学び深めていった。その結果, 90%

の児童は「【楽習シート】に取り組んだことで、授業がわかるようになった。」と感じている。また、単元末テストの正答率でも、どの学年も概ね85%以上であった。

そこで今年度は、【楽習シート】を発展的になくし、【楽習シート】で得られた良い部分を残しつつ、子どもがすでにもっている知識や経験を活かしながら、児童が自力で目標を設定し、学習に本気で取り組む姿をめざして研究を進める。そのために、単元のゴールを明確にし、教材研究を丁寧に行って、児童に付けたい力を単元全体のどこでどんなふうに指導するか、すべての児童が考えをもつにはどのような学び方が必要か、児童が必要感を持てる学習活動にするにはどうしたらいいかを考えて、すべての児童が「できた！わかった！」と実感できる授業づくりをしていく。

東広島市においても「学校における働き方改革取組方針」及び「第五次学校教育レベルアッププラン」に示した「授業ルネサンス」（校内研修の多様化、同僚と学び合う校内研修）の視点で校内研修改革を推進している。

平成19年から行われている国立教育政策研究所による「教員の質の向上に関する調査研究報告書」では、力量形成には授業実践や教育に対する考え方に最も影響を与えたものが「学校内での優秀な教員との出会い」であるという調査結果がある。今後、実践的知識や指導技術を組織的・計画的・継続的に次世代の若手教職員や中堅教職員へ継承していく機会が重要となる。教職員一人一人の資質と学校の教育力を向上させるために校内研修を充実させる必要がある。教職員自身も主体的に学び、指導力を向上させることで、児童の学力向上・生活指導上で力をつけることができると考える。児童に自分で学ぶ力をつけるとともに、校内研修を通して共に学び合う教職員集団の育成を図る。

(3) 研究仮説

○国語科の授業において、教材研究を丁寧に行い、ゴールを明確にして必要感のある授業づくりをおこなえば、学びを実感できる児童の育成に繋がるであろう。

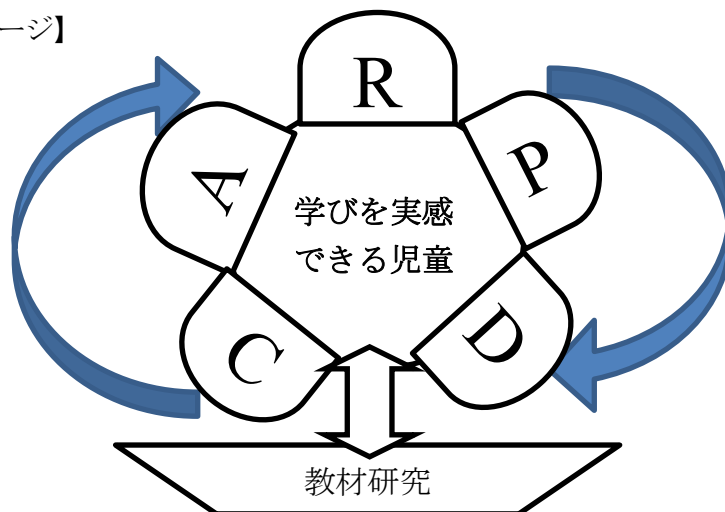
(4) 研究内容

- ア 国語科において児童の単元学習後の姿を想像し、ゴールを明確にして必要感のある授業内容を構成し、誰にでもわかる授業づくりを工夫して、児童が学びを実感できるようにする。
- イ 学習規律の徹底を図り、児童が自力で目標を設定し、本気で学習に取り組む学習環境を整える。

(5) 検証の視点とその指標

検証の視点	方法	検証の指標
ア ゴールを明確にして、誰にでもわかる授業を工夫して、児童が学びを実感できる授業を行ったか。	・教師の事後研修の振り返り意識調査 ・単元末テスト	教師の研修満足度状況 【肯定的評価80%以上】 児童の単元末テスト正答率 国語（読む／言語） 【低88%中85%高82%】
イ 児童が自力で目標設定し、本気で学習に取り組んだか。	児童意識調査	児童の学習満足度状況 【肯定的評価80%以上】

【研究サイクルイメージ】



2 検証計画

- ①各種調査実施による現状分析（5月末・12月末）
 - 児童意識調査の実施，現状把握及び目標値修正
- ②授業研究による継続分析（6月～12月）
 - 協議及び講師の指導に基づく授業改善情報収集，資料整理及び修正
- ③理論研修，指導力向上演習等実施による分析（5月～1月）
 - 講師の指導に基づく研修改善情報収集，資料整理及び研修内容修正

3 校内研修計画

